

子規淨土

——子規の俳句をめぐつて——

松林尚志

1

御座敷唄だという。

「金毘羅船々 追手に帆かけて シュラ

シユ シユ シュ まわれば四国は、讀

州那珂の郡 シュ まわれば四国は、讀

象頭山 まわれば四国は、讀

金毘羅船々 度まわれば 一

金毘羅船々 度まわれば 一

と氣力で生き抜いてきた子規も、この頃はもう地獄を思わせる末期の病床にあった。カリエスは身動き出来ないほどに骨を冒し、身体の表面にまで腐ったようく黒く化膿した傷口をつくっている。苦痛がつのれば癪瘡を起して家人を叱りつけたり、時には絶叫号泣したりする。「逆上益ハゲシ」とか、「精神激昂夜一入りテ俄ニ烈シク乱叫乱罵スル程ニ頭イヨ／＼苦シク狂セントシテ狂スル能ハズ」という状況にたえず直面していた。そういう病床の子規を頭において読む時、「春の海」の句はなんと美しいどのかな世界に見えるだろう。われわれにもなじみ深い「金毘羅船々」の歌は幕末頃から明治初年にかけて全国的に流行した

母ノ花見二行キ玉ヘルニ
たらちねの花見の留守や時計見る

律士筆取にさそはれて行けるに

看病や土筆摘むのも何年目

という句があつて、この句が子規にとつて最後の年となつた明治三十五年春作られたものであることがわかる。強靭な生命力

身内の老幼男女打ちつどひて
鰯鮓や一門三十五六人

(25年)

金毘羅に大絵馬あげる日永かな（27年）

というようなものもみえる。これらの句も華やかで明るくのけさを湛えている。このような明るさは子規生得の資質といつてよいものであろう。子規にはどんな逆境にも愚痴をこぼしたり、弱音を吐いたり、深刻ぶつたりすることを潔しとしないわばますらをぶりといつた気質がある。それは精神そのものが属性として持つ健康さといつてよいかもしない。われわれが子規に惹きつけられてやまないのはこういう気質や精神の健康さに負うところが多いのである。春の海の句は、子規のこのよだな魅力を存分に發揮した句であるが、それとは別にこの句は子規にとって俳句とは一体何であったかということを象徴的に語つてゐる句のように思える。子規にとって俳句とは何であったかということを考えることには、自ら子規の行なつた俳句革新の意味にも触れることになるであろう。

も短期間に残された作品の厖大さである。子規をあのような大量な句作へと驅りたてたエネルギーの源はなんであつたろうか。

この問は多分俳句だけに向けることは適当でないであろう。初期から晩年までの隨筆類に示した表現を求める異常なまでの執念、短期間で成就した短歌革新にみせた懾烈な闘志、俳句分類という超人的な仕事、果敢で精力的な評論活動、どれ一つをとっても子規のエネルギーの激しさを示さぬものはない。このようない子規の仕事は西洋文化の怒濤のよだな直撃にさらされた明治初期の、不安と期待の入りまじる活力に満ちた革新の風潮を抜きにしては考えられないであろう。

西洋の衝撃は日本に急速な近代化をもたらしたが、日本にとってこの近代化とは何であったらうか。一口でいえば、それは異質の文化的衝撃がもたらした国家的規模における自我の覺醒の過程といえるであろう。幕末から明治にかけてひたひたと押寄せた歐米の文物に対して日本の若い知性は敏感に反応しつつ覚醒していく。西洋の文化はすぐれて知的版団の拡大の上に成立つてゐる。自我の自覺は知の自立をもたらす、さまざまな形で克服しようとする反応を招いた

したが、知は世界を解釈することを通じて貪欲に世界に君臨しようとする。

パascalの、「要するに自我は二つの特質をもつてゐる。すなわち、それはそれ自身において不正である。なぜならそれはあらゆるものの中の中心になるから。」「誰もかれもが自己をほかのすべての人々の上にすえ、また自分自身の富、自分自身の幸福、自分の寿命をほかのすべての人々のそれらより愛することは、何という狂った判断。」

（パンセ）という言葉は西洋の自我の自覺が神の領域を摩するまで、つまり不正と意識されるまで深められていたことを語つてゐる。知は世界を解釈し批評しつつ支配し、版団を拡げる。それは比喩的にいえば帝国主義的であり、ファシズム的である。

目覚めた自我は知的支配者として君臨しようと、野心に満ちた革新者としてたちあらわれる。近代化のなかで肥大した自我はたえず現実とのギャップに直面せざるを得ず、そこにさまざまの近代の魂のドラマが演じられたわけである。

日本が西洋の文化を一方的に拝跪するのではなく、自我の自覺を通じてそれをさまざまの形で克服しようとする反応を招いた

ことは江戸時代の日本の知的水準の高さを示すものであろう。欧化と国粹の両極の反応の間には福沢諭吉のような功利主義的立場から西洋文化の優れた面を精力的に移植しようとした啓蒙家もあれば、二葉亭四迷のように挫折を重ねつつどこまでも内省的に懷疑逡巡していく醒めた自我があり、文學を通じて西洋を克服するために血みどろの苦闘をした漱石のような誇り高い知性もあつた。漱石の盟友子規も近代の宿命を激しく典型的に生きた一人である。子規は活動の渦中に羈絆と野心に満ちた青年として登場した。「世間野心多き者多し。然れども余れ程野心多きはあらじ。(中略) 縱し俳句に於て思ふまゝに望を遂げたりとも、そは余の大望の殆んど無窮大なるに比して僅かに零を値すのみ。」(二十九年三月十七日付虚子宛書簡) という言葉にあるように、子規はむき出しの野心を鬪志にふりかえた。「何でも大将にならなければ承知しない男」(漱石「正岡子規」) であった。子規ほど近代的自我の宿命を明快率直に表現している例もめずらしい。旺盛な好奇心と鬪志によつてあらゆる分野に批評の筆鋒を向けた子規の評論活動はまた近代的自我の

覚醒がもたらした知の貪欲な支配欲を典型的に示している。

一人の青年がどれだけ才質と教養に恵まれていたとしても氣宇壮大な野心が次ぎ次ぎと挫折を経験しなければならないことは見易い道理である。少年時の子規は、「朝に在ては太政大臣となり野に在りては国会議長」となることを夢み、自由民権の政談演説に熱中する時期をもつた。政治への野心は病弱もあつたろうし、松井利彦氏が指摘するように、「佐幕藩出身の士族であり、一般的な意味での政治的・社会的な成功の道を閉ざされた」(『正岡子規の研究』)

状況もあって断念したようである。しかし、政治への関心は断ちがたく、新聞『日本』へ入社後も従軍記者として病魔を反対されながら従軍している。その時は大喀血をして半死半生の状態で帰らざるを得なかつた。大学予備門では哲学を志望する学生であつたが、大学も中途退学という結果に追いつかれ。その前後には小説家として立とうとし、小説「月の都」を携えて露伴を訪うが、その小説も断念せざるを得なかつた。露伴は子規の小説について「羈気強し」というような評言をも交えたようであ

るが、この言葉は子規の一面をついていて興味深い。おそらくこの小説執筆や俳句分類を始めた明治二十四年から大学を中退する明治十五年あたりまでが、子規にとつて重大な岐路となる精神の危機に直面した時期であつた。

子規が最初に喀血したのは明治二十一年のことであり、将来にむけての肉体的不安は重く刻印されたことであろう。経済的にも親戚からの援助に頼る不如意の身で、自立の希望が強かつた。大学の勉強は漱石の応援をあおいでなんとか追試験に通ることもあつたものの、遅れる一方であるし、語学はとてもついていけそうにない。このような状態で子規はしきりに脳病を訴えている。

私も前月末頃脳病(鬱憂病ノ類)ニ罹り学科も何も手につかず候故十日の閑を偷んで(尤学校ハ大方休ミ也)房総地方へ行脚と出掛申候。(二十四年四月六日付大原恆徳宛書簡)

昨夕已來額に皺ののぶことなく今朝に至ても脳てん不相変しんしんとやつて居れは何事もいや、春雨も涙の種なり。(二

十五年三月一日付五百木良三宛書簡)

小生昨日移転の際脳痛烈しく起り候處今朝に至てもやまず（二十五年三月一日付河東秉五宛書簡）

如月子への愚書に認めたる如く僕近來精神悶々狂せんとするもの数々也。（二十一年五月四日付虚子宛書簡）

これらの書簡の言葉をみると、自信家子規がかなり精神的に追いつめられた状況にあつて、それが脳病という形であらわれたことを物語つているように思われる。子規の脳病は、四月六日付書簡にみえるようにな、二十四年三月末頃から始まり、二十五年五月十六日付碧梧桐死の書簡には、

小生脳病に付ていたく御心配相かけ相すまざる義に御座候。小生脳病とハ申ながら朝に晩に痛い（）と申方の病にてハ無之只も神經病的の脳病にて候へどもそれも此頃ハ大いによろしく候故御安心被下度候。

とあつて、快方に向かつたことを報告しているから約一年間続いたようである。（二

十五年六月に試験が終つたあと、七月に帰省するが、郷里で落第の知らせを受ける。

二十四年頃から子規は俳句に熱中し始めていて、二十五年二月には一日十二句の実践を試みたり、その頃すでに四百部以上を蒐めた『俳書年表』なるものも作つてさういだ。落第はある程度覚悟の上のことであつて、退学を決意するのにそう時間はかからなかつたはずである。大学や小説に自信を失なう一方で、俳句にますますのめりこんでいき、それは必然的に大学の勉強から子規を遠ざけたである。子規は見方によつては、「すべての野心を俳句の十七文字に集中しなければならないところに追いつめられていた」（江藤淳『漱石とその時代』）のであり、俳句に活路を見出すことによつて危機を切抜けることができたのだともいえる。陸羯南に、「近ごろ俳句の研究にかゝつて少しく面白味が付いて来たから、大學をやめて之をやらふと思ふ。」（子規言行録序）と語つているところなど、さまざまの野心挫折の代償として俳句が選びとられたことを語るものに外ならない。大切なことは、俳句という反近代的な形式を

うことであり、その辺の屈折した事情を解きほぐすことが子規の俳句革新を理解する鍵となるであろう。先に引いた、「俳句に於て思ふまゝに望を遂げたりとも、そは余の大望の殆んど無窮大なるに比して僅かに零を値すのみ」という言葉は、こういう事情を考えることによつて始めてよく理解できるのである。

3

子規は少年時代漢詩人たることを志したほどに江戸時代の延長である封建的な教育のなかに育つた。俳句は梅室門の宗匠であつた大原其戎に明治二十年に入門して手ほどきを受けている。子規が其戎を最初の師として以後師を得なかつたと『筆まかせ』に記していることは注目される。子規の初期の俳句をみても封建的な教養の延長である旧派の月並の世界にどっぷり浸かつてゐたことがわかる。このような場にいた子規が、俳句に近代の詩としての可能性をどのようにして見出しえたのであろうか。その答えはおそらく子規が二十四年頃から始めた『俳句分類』の仕事に求められるであら

う。分類の仕事を通じて過去の俳句を糾瀆しに検討することによって俳句のあるべき姿を見出したのであって、そのことは子規の俳句革新を見る上でいくら強調しても強調し過ぎることはないであろう。

子規は俳句の美に歐米の詩が教えてくれる新しさを導入しようとしたわけでもなく、前衛的な革新を試みたわけでもない。むしろ子規の革新は蕪村発見を中心とする復古の意味をすら帶びているのである。俳句はその詩型に相応しい独自な美を実現することによって自らの詩型を堅固なものと

してきた。この俳句を俳句たらしめる固有の美を見詰めることはこの詩型の命運を見詰めることである。子規の革新はこの詩型の命運に殉ずることと一つであったといつてよいかもしれない。

子規が俳句にみた新鮮な美とは『猿蓑』や『蕪村七部集』に開眼していく過程を興味深く語った『瀬祭書屋俳句帖抄上巻』出版するに就きて思ひつきたる所をいふ』の文章から察知できるように即物的なイメージの美であった。子規にとって俳句の進歩とは、「物がはつきりみえてくる」階梯として捉えられている。子規によつて月並俳

句と批判された当時の旧派俳句は多く比喩や理屈や言葉遊びや使い古したイメージの陳腐な繰返しなどに泥んだ沈滯のうちにあつた。子規は物を新鮮に存在させるだけで俳句を蘇らせることができたのである。それは物や心の真実に詞ができるだけ近付けることであつたといつてよい。子規の革新の場を示した月並俳句批判が、物や心の眞実と離れた言葉の遊びや論理を徹底的に排除することを内容としているのはそのためである。

俳句のイメージの美を自覚した時、無限に変化に富んだ自然がほとんど未開拓のまま横たわっていることに気付くのはそう難しいことではない。「試みに郊外に出でよ、何物か詩趣ならざらん、何事か材料ならざらん」(『俳諧反故籠』三十年)という認識に達するのにそう時間はかかるなかつたはずだ。天然の美を詠む詩型として俳句を自覚した時、野心家子規に、「俳句を蔽いたいという渴望」(栗津則雄『正岡子規』)が兆したことは充分考えられることがある。意氣軒昂たる青年子規が度重なる断念挫折を強いられながら、めぐり得たこの壮大な夢を前にして奮いたたぬはずはない。その鬱積したエネルギーが一気に堰を切つたように奔騰してあのような二十五年以降の多作へとつながつていったとみてよいだろう。俳句の命運について、「歌、發句共に永久のものに非ズ。殊に發句ハ明治に盡くべきものと小生の豫言也。」(虚子

子規の俳句と短歌数 (抹消歌は除く)

明治	俳句数	抹消句数	拾遺句数	短歌数
18年	7	15	1	58
19	1	15	1	14
20	23	25	7	1
21	31	17	124	69
22	32	49	82	12
23	53	39	219	54
24	230	210	136	58
25	1665	868	536	30
26	2998	1636	175	36
27	1965	401	279	17
28	2836	7	51	45
29	2994	7	249	—
30	1466	17	59	6
31	1409	34	25	666
32	903	13	32	365
33	641	10	4	644
34	524	5	—	89
35	412	6	—	63

宛、二十四年十二月一日付書簡) という認識をもつていたとすればなおさら功を急ぐ氣持はわかるのである。

私は物を新鮮に存在させるだけで子規は俳句を蘇らせることができたと書いたが、物を新鮮に存在させるための方法として子規は写生を説いた。子規の写生はできるだけ主觀を排除し、平淡にありのままに天然を写しとることから出發した。無限に變化に富んだ天然を手当り次第に俳句に切りとついくには余計なことは必要なかつたのである。それはむろ多作が要求される俳句観といつてもよく、大衆にも門戸を開く道でもあつた。それは現代俳句が達成し得た豊かな実りへの第一歩を切り拓く道でもあつたのである。子規の多作がこのようにそれを必然とする俳句観の上にたつてなされているということは充分注意しておいてよいことだと思われる。

この辺で私は講談社版『子規全集』によつて、子規の残した俳句数を短歌と共にあげておきたい。

『我が俳句』(二十九年) に子規は、「明治二十四年頃より稍々俳句に熱心し、之を

研究せんと思ひ起したり。此頃少しく実景を写出さんと企てたれども毫も成功せず、猶前日の優柔孱弱の風を免れざりき。此年冬始めて七部集三傑集を読み大いに感ずる所あり。漫遊の念燃なり。僅に三日糧を裏みて武藏野を踏んで帰る。」と書き、「明治二十五年以後は殆ど俳句を生命とし、古書を読み句を作り以て今日に及べり。」と書いている。武藏野に始めて吟行に出かけた二十四年から増えはじめ、二十五年に至つて「俳句を生命と」するまでに打込んでいったさまでその句数から窺うことができ。病床に臥す時期の長かった子規のこゝう旺盛な制作活動をみると、私は俳句に振替えられた子規の野心の壯絶さを思わないわけにはいかない。

4

我が韻文は叙事よりも叙情を主とせり、叙情よりも叙景を主とせり、語を換へて言はゞ錯雜にして変化多き人間社会の現象を模写せずして専ら簡単にして静黙なる天然ネイチャーナチュラルを模写せしが為なり。(『我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず』) 二十九年十月)

人生無量の変化を写出さんと欲すれば長篇に由らざるべからざれども天然の雅景を模し来るには数十字の短篇にても可なるべし。(前同書)

歐米諸国の詩歌は主として人事を叙す。和漢二國の詩歌は主として自然を叙す。人事を叙する者は錯雜混亂せるが為に長篇の詩歌と成り易く、自然を叙する者は簡単純粹なるが為に短篇の詩歌を生じ易

るにあたつてなんとしても自らの実践を正当化する視点を持つことが要求されたであろう。明治十五年から二十七年にかけて書かれた、「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」「文学雑談」「春色秋光」「文学漫言」などには俳句を日本独自な詩として西洋の詩に相拮抗させようとする子規の開き直った王張が隨處にみられる。

子規は反近代的な封建の遺物ともいえればいえる俳句をもつて野心実現の場とせざるを得なかつた。歐化の波のなかで欧米の作品がつぎつぎと紹介され、露伴、逍遙、二葉亭などの小説が発表される。新体詩の試みも急である。子規としても俳句に集中す

し。（中略）西詩の複雑と國詩の簡潔は
両立して不可なべし。〔文学雑談〕
二十六年一月
焉んぞ知らん人間は宇宙の一部分にし
て所謂自然界は渺々漠々人間の四辯に際
限も無く広がり居るを。人間界は善惡混
淆眞偽錯出して榮枯盛衰は朝夕を計ら
ず、一生一死は百年の瞬間を保つ能はざ
るに独り自然界は一定の時間に一定の変
遷を経、江上の清風と山間の名月とは千
古依然として取れども盡くるなきに非ず
や。（春色秋光）二十六年十月

文学は直接に吾人が感覚に訴へて快樂を
生ぜしむべき美術の一種なりとせば其快
樂を起すべき天然が何故に文学たらざる
か。況んや天然より起す所の快樂が必ず
しも人事より起す者に比して少からざる
をや。（文学漫言）二十七年八月

俳句を学び俳句固有の美を自覺した時、
俳句は短いけれども歐米の長篇の詩文に対
して充分対抗し得るだけの独自な美を持つ
ものであることを子規は確信したようであ
る。それは子規の新体詩に対する辛辣な批
判をみても分かるように、たんに負け犬的

に俳句に開き直ったのではなく、しっかりと
両立して不可なべし。〔文学雑談〕
二十六年一月
焉んぞ知らん人間は宇宙の一部分にし
て所謂自然界は渺々漠々人間の四辯に際
限も無く広がり居るを。人間界は善惡混
淆眞偽錯出して榮枯盛衰は朝夕を計ら
ず、一生一死は百年の瞬間を保つ能はざ
るに独り自然界は一定の時間に一定の変
遷を経、江上の清風と山間の名月とは千
古依然として取れども盡くるなきに非ず
や。（春色秋光）二十六年十月

文学は直接に吾人が感覚に訴へて快樂を
生ぜしむべき美術の一種なりとせば其快
樂を起すべき天然が何故に文学たらざる
か。況んや天然より起す所の快樂が必ず
しも人事より起す者に比して少からざる
をや。（文学漫言）二十七年八月

俳句の実作に自信を深めてきた子規が
「日本」という場を得て次のようにいうよ
うになつたのも理解できることである。

俳句の実作に自信を深めてきた子規が
「日本」という場を得て次のようにいうよ
うになつたのも理解できることである。

意匠の上より言へば本邦普通の和歌程意
匠に乏しき者あらず。言語の上より言へ
ば本邦普通の俳句程言語の卑俗なる者あ
らず。而して此和歌此俳句は實に我邦固
有的純粹なる韻文として他邦に誇らざる
べからざるものに非ずや。然るに外に對

して誇らざるべからざる和歌俳句は互に
相輕蔑するのみならず和歌俳句其仲間に
於て相反するに至りては終に是れ國粹を
發揮する所以にあらざるなり。（「文学漫
言」）

和歌俳句を誇らざるべからざるものとし
て自覺すると共に國粹を發揮する所以をそ
こにみているのである。ここに至つて子規
は遲疑逡巡することなく自負をもつて俳句
に邁進することができたのではないか。こ
もしぬれない。しかし、子規の庇護者であつ
た陸羯南でさえ因循矮小な俳句に子規が熱
中することに危惧を抱いてさえいたのであ
る。

5

子規は反近代的な伝統詩型である俳句を
近代詩として蘇らせることに成功した。写
生は近代的合理主義精神に添うものであ
し、豊かな自然に眼を開くことは自然との
積極的な触れ合いを通じて自我の解放にも
つながつた。しかし、自己表現という面か
らみると子規の写生は近代ロマンチズム
の流れとはおよそ対極のところにあるよう
に見える。白秋や有明の眼からみると子規

には詩人としての想像力が欠陥していて、そもそも詩人たる資格はなかつたのである。子規の俳句は少なくとも出発においては「天下をとる」野心実現の一つの場として選んだのであって、俳句を自己表現の手段として選んだのではないということは子規の俳句を見る上で注意すべき大切な点だと思われる。

病

いまだ天下を取らず蚤と蚊に病みし

30年

病床にあつてもこういうことを堂堂といえる子規であった。

それでは俳句に近代を開いた子規の写生俳句の新鮮さとはどういう作品にうかがえるであろうか。

夏山を廊下づたひの温泉かな
蘆の葉と共にびくや行々子
墓は皆涼しさなり杉木立
木下闇ところぐの地蔵かな

これは一十六年夏の作品である。ここに

は生活の哀歎もなければ人間的な憧憬や苦悩もない自然の懷に抱かれた穏やかで醒めた子規がいるだけである。内面的なものはすっかり捨象されて視覚そのものと化した子規がいる。しかし、これらの句は俳句を叙景詩と規定した意味を実作で実現するこ

とに成功した作品といえるだろう。ここにある自然の新鮮なたたずまいこそ叙景詩としての俳句が表現すべき独自な美であった。俳句という詩を実現するために自然の美そのもののなかに徹底的に自己を消していったのが子規の出発であった。

子規は多様な自然を精力的に俳句に写していくのであるが、それは必ずしも実際に見たものだけに限定されたわけではない。俳句によって世界全体を蔽おうと考えても病床の身で実際に見ることができるものには限界がある。勢い頭のなかで作らざるを得ないのであって、むしろ想像力によつて仮構の世界を自在に詠みこなしたもののが多いのである。架空の世界を自在に俳句に詠みこんだ燕村に傾倒した子規にとってそれは当然の実践であったといえよう。

古妻やうら枯時の洗ひ張
勘当の子を思ひ出す夜の雪

初雪を恐る、妻や針仕事

亡き妻を夢に見る夜や雪五尺

老妻の火を吹く顔や鮫鱗鍋

35年 32年 32年 29年 26年

子規にはこういう句もあるのである。フイクションであつてもあり得る又はあり得た事実ならその合理的写実的精神に反しない。しかし、俳句を私的な発想のものとして捉え、作品を個の生活の真実とだぶらせて受取る現代の眼からみると戸惑いを覚えるのではないか。子規には又、

長き夜や古傾城のさゝめ言
うた、ねや遊女の膝の明け易き
朝顔に傾城たちの軒かな
傾城を買ひに往く夜や鮫鱗鍋

35年 29年 29年 28年
のよう、傾城を詠んだ句も沢山ある。
愛を封建的な因縁に泥んだ傾城との交渉と
いう形でしか表現し得なかつたところに子
規の不幸があつたといえるし、こういう仮
構の世界はある意味では趣味的な遊びの世
界といえるかもしれない。しかし、和歌が

長いこと題詠を作歌の動機としてきたり、俳諧が自由な空想の世界に付合を娯んだことを思えば、こういう仮構そのものが文学といえればいえるのである。文学における古典主義は感情の放恣な表現ではなくて、美的規範に奉仕するストイックな態度を意味した。子規の俳句にはこのよくな反近代ともいえる態度がごく当たり前のように同居していることは事実なのである。これら句は天然を写すというより人事を詠んでいる。仮構の夫という立場や傾城買ひの立場からの思いを巧みに表現してみせるのであるが、そういう思いまでをも客觀化してしまふ子規の態度は徹底している。子規には想像力がないから詩人ではないという説があるが、雲の上に天使を夢みるのだけが想像力ではない。経験しない事實を経験したことなく濃密に喚起し得る力も想像力である。

私は子規の多作はそれを要求される俳句觀からもたらされたものだと述べた。そのことは子規のような俳句觀をもてば誰にも多作は可能であるということを意味するだろうか。もちろん否であつて、少なくとも子規の水準であれだけの作品を短期間に生

むことはおよそ不可能といつてよいだろう。寺田透氏は子規の「心象喚起力の実に強大なこと」(『正岡子規』)に驚くと書いているが、その柔軟自在な表現力は尋常ではない。子規の想像力は驚くほどの鮮度と正確さと多様さをもって自在に展開している。子規の句は駄作も多く平淡のようであるが飽かず惹きつけるだけの魅力をもつてゐる。

蝶々や順禮の子のおくれがち
夕立や竝んでさわぐ馬の尻
あたゝかに白壁ならぶ入江かな
春風に顔ならべけり燕の子
くるゝ迄子の遊びけり夏の川
ゆら／＼と比良の尾上の藤哉
とう／＼と太鼓のひゞく若葉かな
柿の花土壇の上にこぼれけり
赤蜻飛ぶや平家のちりぐに
糲干すや鶏遊ぶ門の内
二村の風集りし河原かな
芹生いて家鴨の足の赤さかな

25年 25年 25年 26年 26年 26年 27年 27年 28年 28年 28年 28年 29年 29年 29年

れないのである。いくら天然が美しいといつてもそれを美しいものとして主体的に把握できる創造的精神がなかつたら何も生れはないのだ。ここには自然を生き生きと経験する健康な精神がある。中野重治は子規について、「彼において、視覚の恢復は人間の恢復だった」(『齋藤茂吉ノート』)と述べているが、子規の夥しい句作はこういう健康な魂を恢復するところまで自我を汲み出し解放することに成功したのである。私は子規が自然の美そのもののなかに徹底的に自己を消していつたと述べたが、子規の場合は虚子のように自己をどこまでも薄めていつて自然そのものと化すよう東洋的無に近付いたのではないか。自然の美に積極的に反応しようとする魂は感性的の純化を通じて結果的に自我を解放し、抒情を解放することになった。子規が短歌にも乗り出し、短歌をも新鮮に蘇らせることに成功したのも必然の歩みといえなうこともない。行くべくして短歌的抒情に至りついたのである。

天然を俳句によつて蔽おうとした時、子規にとつて手掛りとなつたのは季題であつたと思われる。兼題で句作りに励むことが

普通だつた当時の習慣に従つて子規がさまざまな季題を精力的に詠みこんでいったときは、子規自身の手により季題別に編纂された『寒山落木』が如実に示している。

したと述べたが、『俳句分類』は俳人子規にとってまた違った意味で重要な役割を果たしたのではないかと思う。『俳句分類』は季題以外の事物の分類もあり、俳句評論を展開する上に大きな武器となつたことは、もとよりであるが、それとは別に過去において何が詠まれ、何が詠まれていないかを知る強力な手引となつたと思う。子規は用意周到で押韻新体詩を作る参考にするため、わざわざ漢詩並みの「韻さぐり」という

虎の巻をさせ作つてゐる。芭蕉でさえ俳諧は三合はすでに出て残り七合だといつてゐるのであるが、子規のように俳句は錯列法から計算してももう寿命は見えているといふように考えていたとすれば、まだ俳句によつて埋められていない部分を知るために索引を作ることが急務として求められたことは充分考えられることである。それはまた同類同様の句を詠まないための重要な考書たり得たであろう。子規のような詩的

修辞をでくるだけ省いた非個性的な写生の作句法からすると類想の句が詠まれ易いのである。

俳句を季題を詠む詩というようにはつきりと割り切つて句作りに熱中した時、そこに子規の個の内面から切り離された別次元の世界が現出する。それは一方では悠揚迫らない姿として映り、一方では傍観的で趣味的な遊びの世界として映つたりする。俳句の美のなかに自己を委ねきてしまふことは現実から眼をそらせる慰藉の方向ともなり、自己救済へと向かう自我の解放がそこには望見されてくるのである。

準は美的感情に在り、故に美的感情以外の事物は美的標準に影響せず。」と述べ、美を感情に基盤づけた。感情を物なり、言葉なり、声調によつて表現するにしろ、感情に即する限り自己表現に行きつかざるを得ない。病者特有の鋭敏さで批評眼を磨いて、いつた子規が、万葉傾倒から短歌的抒情に眼を開きつつ心の真美に詩の所在を見出していくことは当然の歩みであつたろう。子規の自我は短歌実作を通じてさらに力強く甦つていくのである。もちろん短歌においても写生の重要を説き、俳句で自覚した調子を重んじるようになつてゐる。

子規の俳句に私的境涯性が目立つて加わつてくるのは病床についてからである。二十九年には病気またはそれに類した前書のある句が三十数句みられる。「病中」の前書のある句をいくつかあげてみる。

この春を鏡見ることもなかりけり
人は皆衣など更へて来りけり
碧梧桐のわれをいたはる湯婆かな
また生きて借錢乞に叱らる、

春を待つ迄に我はや老いにけり

小夜時雨上野を虚子の来つゝあらん

ここには悠悠と天然の美を思い浮かべつ
つ句作をたのしむ子規の面影はない。病気
は否心なく子規を現実へ引戻してしまつた
ようである。

いのちありて今年の秋も涙かな

行く年を母すこやかに我病めり

弱音を吐くことを潔しとしなかつた子規
にとつて、こういう句を書かざるを得なかつ
たということは不本意なことであつたに違
いない。しかし、こういう「自」を凝視めた
句においても子規の強靱な詩精神は少しも
乱れがない。同じ年の「病中雪」と題した
次の四句、

雪ふるよ障子の穴を見であれば

いくたびも雪の深さを尋ねけり

雪の家に寝て居ると思ふばかりにて
障子明けよ上野の雪を一目見ん

は、茂吉の「自然・自己」一元の生を写

す」という写生観に引継がれていく、平明

ななかに言葉・心・現実が過不足なく融和

して渾然とした詩の世界を表現し得ている

と思う。叙景詩とか写生とか俳句プロパー
のものとして定義してきた句作のあり方は
雲散霧消している。心そのものがそのまま
なんの飾り気もなく書きとめられているだ
けである。この境地は子規晩年の隨筆の規
力と同じところにある。

大正五年、「鶴頭の十四五本もありぬべ
し」「五月雨や上野の山も見飽きたり」の

二句をあげて、「これから子規の進むべき
純熟の句がはじまつたのである。」(『童馬
漫語』)と書いた茂吉は、また子規につい
て、「子規の晩年は、俳句も和歌も自在に
作つたのであるから、もうこの二つは一如
になつてゐたのではないか。」(『正岡
子規』)と書いた。茂吉が子規の俳句にみ

たものは、その写生論が主客一如に至つた
ように歌俳一如に至つた良さであつた。雪
の四句はそういう境地に至つた作品であつ
て、これは虚子の客觀写生の範疇では捉え
きれない自在さに至つてゐる。虚子は茂吉
の認めた鶴頭の句を認めなかつたようだ
のである。

て近寄るまいとしたのである。

晩年に自在な感情流露にまで至つた子規
であるが、そのことはその俳句作品のほど
んどを占める第三、三人称的抒情ともいえる俳

句的詠嘆の題詠を詠まなくなつたといふこ
とではない。子規は最後まで空想のなかで
自在に句作を楽しんでいたようみえる。
『仰臥漫録』から少し引いてみよう。

夏ノ月京ハ夜店の灯カナ

浴衣著テ田舎ノ夜店見ニ行キヌ

金ピラノ社ヲカクス茂カナ

トコロ／＼鹿ノ顔出ス茂リカナ

草市ノ草ノ匂ヒヤ広小路

川蟬ノ魚ヲ覗フ柳カナ

薰風吹レ袖釣竿擔く者は我

下総ノ国ノ低サヨ春ノ水

病床にあって子規は短かつた一生のさま
ざまな経験を俳句に汲み出すことに生きる
欲びを確かめていたのではなかつたろう
か。そのことによつて目前に迫つた死の觀
念を受入れることを拒否することができた
のである。

子規の厖大な俳句は多様で變化に富んだ天然に見合うだけの俳句が生み出されて然るべきである、という俳句觀から導き出された產物であり、一つの成果であった。別のいい方をすれば、俳句に芭蕉の求めたよなきびしい詩としての高みを希求したのではなくて、平明さのなかにある身近な美を求めたということである。「写生の作を見ると、一寸浅薄のやうに見えて、深く味へば味はふ程変化が多く趣味が深い。」

〔『病床六尺』〕というような所に子規は賭けたのである。しかし、写生の作といつてもまだ写せばよいといふものではない。子規自身もこういう微妙な味わいを会得するには年月を要したのである。

子規は三十五年四月に自選句集『瀬祭書屋俳句帖抄』上巻を出版しているが、自選にあたっての感想を述べた興味深い文章を残している。

明治二十六年頃から明治二十九年頃迄は年々俳句の数は非常に多いが、其割合に

〔瀬祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ〕

多産された句がそのまま俳句として優れたものかどうかということは自ら別問題である。二十六年には濫作の極に達して、「実景ならば何でも句になると思つたのは間違であったのだ。」と書く。これは当り前といえば当り前のことなのだが、子規にとっては苦い反省なのである。二十七年には毎日のように根岸の郊外を散歩して得るに随つて俳句を書きつけ、「写生的の妙味は此時に始めてわかつた様な心地がして、毎日得る所の十句二十句位な獲物は平凡な

佳句といふべきものは殆どない。自分が句を作る上に於て著く他の人と違ふ所は多きを負るといふ事であった。それであるから一度心に浮んだ句は何でも棄てぬ。一度口から出た句は何でも書きつけて置くといふやうなわけになって来て、年々歳々たまつたところの駄句の数は実際に驚くべきものである。(中略) 何年かの間に一方で多少の進歩をした事もあるらうが、其時でも他の一方では矢張駄句が累々として来る。

品目に通しつつ自選にあたった時の、うんざりするような自己嫌惡にも似た気持が吐かせた自嘲であり自己蔑視の言葉だったと思う。たしかに駄句といえば駄句であるが、子規の句は凡作であつても悪作は少ない。小手先の技巧を凝らした宗匠的臭氣のある句はなくなっている。厭味がないから平凡であつても飽きないのである。そして、この平凡さは平凡さを生むための必要な不可欠の修練であり、一種の無駄であつたようと思える。写生の妙味を見出すには沢山作つてみねばならないのである。

子規は『仰臥漫録』にみせた、食事のメニュームまで丹念に書きつけねばおれなかつたような自己執着の強い人間であつたから、多少レベルの低い句でも捨てないで残した面があった。『寒山落木』は読むものにとつてもつと絞つてもらつた方が良いことは疑いないとこであるが、私には子規

句が多いけれども、何となく厭味がなくて垢抜がした様に思ふて自分ながら嬉しかつた。今日から見ても此見解は間違つて居ない。」というまでになった。子規の夥しい俳句には子規自身がいうように凡作が多い。子規のいう駄句というのは、厖大な作品目に通しつつ自選にあたつた時の、うんざりするような自己嫌惡にも似た気持が吐かせた自嘲であり自己蔑視の言葉だったと思う。たしかに駄句といえば駄句であるが、子規の句は凡作であつても悪作は少ない。小手先の技巧を凝らした宗匠的臭氣のある句はなくなっている。厭味がないから平凡であつても飽きないのである。そして、この平凡さは平凡さを生むための必要な不可欠の修練であり、一種の無駄であつたようと思える。写生の妙味を見出すには沢山作つてみねばならないのである。

の精神の多様な運動の内側がわかつてそれなりに面白いのである。自然も全部が全部

新鮮な相貌を示すとは限らない。

世評の高い有名な「鶏頭の十四五本もありぬべし」という句の周辺にある鶏頭を詠んだ句をあげてみよう。

萩刈て鶏頭の庭となりにけり

朝顔の枯し垣根に葉鶏頭

鶏頭や一度の野分に恙なし

鶏頭に車引き入る、ごみ屋哉

鶏頭の四五本秋の日和哉

これらの句には飽かず鶏頭を眺めいとお

しんでいるさまがそれぞれによくでている

と思う。「十四五本もありぬべし」だけが

鶏頭に対する発見ではなくて、これらの鶏

頭の句の中の一つとしてそれは詠まれてい

るのである。子規は晩年蕪村の連作につい

て、「新花摘の句は同じ題で七八句作つてある。而もそれが同じ日の中に書いてあ

る。(中略)吾々が最も感心する所の句は

多く一題七八句の中にある句で、つまり極

めて無造作に出来たと思ふ句なんである。」

(『瀬祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就

きて思ひつきたる所をいふ』)と述べて蕪

村の無造作に作ったような連作を賞揚し、

自らも一題何句のような連作を実践した。

鶏頭の句は連作を意識したものではないか

かもしれないが、蕪村を意識した無造作な句

作りをしたものであろう。虚子が『子規句集』を編むにあたって、この年の鶏頭の句

として

冬近き嵐に折れし鶏頭かな

の一句をとつていてるだけ、他はすべて

捨ててしまつたことはよく知られている。

こういう写生句はすべてをとつてもよい

し、すべてを外してもよいような評価の動

く危険が伴う。好悪は鑑賞者の個人的な経

験によって随分違つてしまつ。十四五

本の句を虚子のように無視する立場も、茂

吉のように別格扱いする立場も生まれてき

てしまう。私のいいたいことは、十四五本

の句も沢山作られたなかの一つであつて、

沢山作ることによつて導き出された句であ

るということである。秀句だけを狙つて寡

作に徹したとしたら子規の多くの秀作は生

まれなかつたに違ひない。無造作な七十点

主義の句作りのなかに深く光るもののが時に

顔をのぞかせるのである。

子規の俳句は詩的修辞から最も遠いところに位置している。西洋で詩を散文から区

別するものは韻律ばかりではなくて、直

喻、隠喻、象徴、擬人法などさまざまな詩

的修辞であつた。ポエジーは内面の高揚し

た情緒として捉えられたから、ポエジーを

言葉に凝縮して表現するためには高度な修辞

が求められたのである。それに引きかえ、

子規の俳句革新はこういう修辞を否定した

ところから出発した。定型韻律以外のもの

を一切白紙に返してしまつたのである。子

規非詩人説が囁かれたのも理由がないわけ

ではないのである。詞と心(物)を両極に

置いた場合、子規は心(物)の真実の方に

徹底的に加担し、詞のもたらす詩的効果か

らできるだけ遠ざかろうとしたのである。

子規の俳句は観方によれば、詩がそこから

始まるべき原風景といえるかもしだれない。

もちろんの情緒に湿りがちな不鮮明な風景

をきれいに拭きとつて有りのままに示した

のである。俳句によつて堅固な風土を厳

しく現出させたのである。しかし、われわれ

は子規の俳句が見せてくれる風景に魅せ

られるとはいえ、子規と同じ作句法で俳句を作ることにためらいを見る。子規から

虚子に引継がれた現代俳句は、夥しい作者と作品によって子規の遺産に豊かな実りを付加した。現代俳句は飽和状態に近いまで

に世界を蔽っているようにみえる。山口誓

子が、「私達は既に子規の作品を乗越えて

現在の地点に到達している。(中略) 子規

の正統派を以て任ずる現在のホトトギス雜

詠は多くの場合子規の作品を凌駕してゐ

る。」(「正岡子規論」といったことは故な

きことではない。現代俳句はイメージの斬

新、鮮烈、屈折の度合において子規の作品

を凌駕した世界を築いていることは事実な

のである。しかし、「今日よりすれば、子

規の作品は概して貧困であつたと謂はざる
であろうか。子規のとるにたりないような作
品も平凡ではあつても眞実であるだけに古
びず捨て難い味がある。子規の『寒山落
木』は堅固な風景としてわれわれの前に立
ちはだかっていることは事実なのである。
むしろそのことが現代俳句を新たな月並へ
の道へと追いつめているようにさえ思え
る。

私は最初に、「春の海」の句は子規の俳
句の魅力を存分に發揮している句であると
共に、子規にとって俳句とは何であつたか
を象徴的に語つて居る句であるように思う
と述べた。それは一つには、「春の海」の
句が、自らを俳句美の世界のなかに投げ
入させることによって空想的に自在に作品
を多産していった子規の作句態度の賜物と
してもたらされたものであるという意味で
ある。空想的な世界に遊びながら過去の経
験を自在に汲み出すことができるようにな
つた子規にして始めてこのような句がもた
らされたのではないであろうか。そして、
長く病床にあつた子規にとって俳句固有の
美に自らを委ね、そこに自己を解放するこ
とができるたということは、かけがえのない
魂の慰藉となつたのではないであろうか。

「春の海」の句は美しい自然を再現すると
いう子規の季題趣味的俳句のあり方を超え
て夢幻の世界に飛翔すると共に、自己表現
にまで至つてゐる。そこには楽しいメルヘ
ンの世界と故郷への思慕がないまぜになつ
た願望までもが表現されている。苛酷な現
実に縛られた自己の表現ではなくして、そ
ういう現実から飛翔しようとする痛切な夢
想が生の歓びそのものとして詠まれてい
る。子規は『病床六尺』で、「病氣の境涯
に處しては、病氣を楽しむといふ事になら
なければ生きて居ても何の面白味もない。」
と語つてゐる。子規の精神の健康さ
は、どんなに肉体が傷めつけられても精神
は常に生の方に向いているという、こうい
う言葉にみえる生き方に端的に表現されて
いる。「春の海」の句の明るさはそのまま
子規の健康な精神の明るさである。

「春の海」の句が、死を目前にした頻死
の病床にある人間によつて作られたもので
あると考える時、この句はまた別な光彩に
包まれないであろうか。子規の精神は最後
まで死の觀念となじみ、それを受容れる態
度にくみしなかつた。死が背後に迫れば迫
るほど生を凝視める目は研ぎ澄まされてく
る一方で暖かく明るく澄んでくる。浄土に
住まうように淨らかで明るい世界をたたえ
ている。春の海に鯛を思いえがき、故郷の
川に川蟬を思い浮べ、かつて遊んだ京都の
夜店に思いを馳せつつ作句に集中する子規

は淨土に遊んでいたのではないであろうか。草花をみつめて写生の筆をとる子規はその花の美しさに淨土を垣間見ていたのでないであろうか。子規は、「草花の一枚を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分つて来るやうな気がする。」(『病床六尺』)と書いているが、造化の秘密がわかつてくるというのは、造物主の意志が行きわたつた世界、無垢な美しさに包まれた神の世界にしらずしらず入つていくということではないであろうか。淨土であり、神である現世を超えた世界である。『菜根譚』に、「心了すれば、則ち屠肆糟塵も、居然たる淨土なり。」(悟つてしまえば、たとい肉屋や酒屋のよくなむざくるしいところにいても、そのままで極樂淨土である)とあるがこんな言葉以上に、子規の句作を楽しむ一時はもつと痛切に淨土であったと私はいいたい。もし淨土という言葉が相応しくないとすれば、救われてあつたといいかえてもよいであろう。子規の句作りは他の短歌や散文も含めて慰藉からさらに自己救済につながつてい

た。「春の海」の句はそのことを象徴するよう美しい光輝に包まれているといえないのであるうか。

子規の句の与えるのびやかで平安な世界にわれわれはしらずしらず惹きこまれる。子規にとつて俳句が慰藉救済であつたように、子規のやすらぎがそのままわれわれのやすらぎとして伝わつてくる故であろう。子規の俳句を通じていつのまにかわれわれも子規の淨土に住まさせられているのだ。虚子は、「如何に窮乏の生活に居ても、如何に病苦に悩んでゐても、一たび心を花鳥風月に寄することによつてその生活苦を忘れ、病苦を忘れ、仮令一瞬時と雖も極樂の境に心を置く事が出来る。俳句は極樂の文学であるといふ所以である。」(俳句への道)と説き、俳句を極樂の文学だとし、花鳥諷詠詩のお祖師様だといつてはばかりなかつた。虚子は子規のみた淨土からさらに極樂へとその道を歩んだのである。慰藉としてあつた子規の俳句の一面を虚子流に引継ぎ、拡げていつたのである。